

# 「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための 相互交流を目指した日本語文化研修 (Ⅷ)

—“大和地域 (飛鳥・吉野・橿原・田原本) の文化史” の実地研修 —

## A Study of Field Trips Held as Japanese Language and Culture Training Course to Understand Creative Cultural Fusion and to Promote Exchange (Ⅷ)

— A Field Trip to Study the History of Culture in Yamato District (Asuka·Yoshino·Kashihara·Tawaramoto) —

戸 田 利 彦  
TODA Toshihiko

In the last paper, a field trip to study regional cultures held during the Japanese language and culture courses of a university was analyzed and problems were summarized for future plans and practices of study camps and field trips. This paper focuses on a field trip to study regional cultures of Yamato. It is planned and put into practice for the purpose of understanding the cultures of Asuka district, Yoshino district, Kashihara district and Tawaramoto district of Nara Prefecture. Its characteristics are summarized as follows:

- 1 This field trip especially attaches importance to understanding creative cultural fusion and promoting exchange and invigorating the local cultures.
- 2 This field trip is a result of two field trips in Kyoto, a study camp in Hiroshima City, a small field trip in Hiroshima Prefecture, a field trip in Setouchi, a field trip in Shimane Prefecture, a field trip in Geiyo district, a field trip in West Chugoku district, a field trip in Yamato district, a field trip in Kibi district, a field trip in Tsukushi district, a field trip in Omi district, a field trip in Sanuki and Tosa district, a field trip in Settsu and Yamato district, a field trip in Buzen and Bungo district, a field trip in Yamashiro district, a field trip in Kii district, a field trip in Hizen district, a field trip in Nishisetsu and Awaji district, a field trip in Izumi and Kawachi district, a field trip in Higo and Hyuuga district, a field trip in Yamato and Ise district, a field trip in Tsukushi district and a field trip in Yamato district.
- 3 A regional study concerning the history of culture in Asuka, Yoshino, Kashihara and Tawaramoto district, is stressed in this trip.
- 4 This field trip includes two lectures, four investigations with lecturers and two free talks by local lecturers.
- 5 This field trip was planned and put into practice mainly by students who are members of the Hijiya University Japanese Language Culture Course.
- 6 There are 10 participants including two foreign students from China who were enrolled in 'Nihongobunka Kenshuu (Japanese Language and Culture Training Course)' for third year students.
- 7 An inspection trip by a teacher was also made before this field trip.

Practices of the field trip are analyzed based on questionnaires filled out by the participants.

Then, problems are summarized for future field trips.

## はじめに

### 〈第Ⅶ期3年計画の意図〉

本研修は、2017年度からは大学認定のコース「重点事業」の企画からは外れ、予算は学科・コースの教育基盤経費から支出されることになった。学内の一日借り上げバス制度が適用されるため、従来の貸し切りバスで広島と研修先を往復する移動型研修から、現地集合・現地解散の形式で中核的な研修エリアを宿泊地として連泊する滞在型研修へとシフトすることになった。その結果、第Ⅶ期3年計画の2年目は、2泊3日の日程で、大和地域の飛鳥・吉野・橿原・田原本を訪問エリアとし、現地で一日借り上げバスを2日目午前と3日目午後を利用して実施した。

第Ⅶ期の2年目の今回は、星・水・山を考察対象として、訪問エリアそれぞれの“自然”と関係の深い“まつり”の実際を踏査・考察することを主眼とした。

### 〈訪問エリアの選定〉

現地集合・現地解散の形式で中核的な研修エリアを宿泊地として連泊する滞在型研修であることを考慮して、まず、飛鳥を宿泊地として決めた。次いで、後述する今回の研修の共通テーマも勘案しながら、主要な研修エリアとして、吉野を飛鳥とセットで選定することにした。さらに、大和三山という“山”を祭祀の対象としていた藤原宮のあった橿原、そして、大和盆地を還流する二つの主要河川（初瀬川・寺川）が東と西に流れ、敷地内の井戸に“水”の祭祀跡が確認されている弥生時代の環濠集落、すなわち唐古・鍵遺跡のある田原本を訪問エリアに加えた。

以上のエリアを訪問し、“星・水・山とまつり”を主たる考察対象として、史蹟・文化施設・景観などの直接体験を通して実地踏査し、また、地元講師との交流を行うことにした。あわせて、“自然”と“まつり”の外に、参加者の個々の興味・関心に基づいて、歴史・文学・芸術などの観点から大和の文化を考察することにした。

さらに、第Ⅶ期の研修においても、“日本の異なる地域の文化”としての「異文化」の“融合”も含めて、精神文化を中核とした「異文化」の創造的融合<sup>注(1)</sup>に着目することにした。

### 〈訪問地域の特徴と共通テーマの設定〉

今回の研修の対象地域である大和は、その最大の特徴として、大和盆地という典型的な盆地を持つこと、また、そこが、日本の国土の中央であること、さらには、そこが日本創生の地であることがあげられる。

大和では、“星”“水”“山”といった“自然”を背景に、“まつり”を生み出す日本人の心のありようが発現してきている。その意味で、大和は、“日本人の心の源流”としての特徴を持つ地域である。

そこで、今回の研修では、内容面を考慮し、共通テーマのタイトルを、“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・田原本—”とした。

### 〈今回の研修における新しい試み〉

今回の研修は、全員参加形式の学校（日本語文化専攻）行事、全13回の自由参加形式の学会（日本語文化学会）行事を経て行われた第11回のコース行事（授業）である。過去20回の研修<sup>注(2)</sup>の問題点もふまえ、‘瀬戸内地域及びその近接地’外の通常研修として2泊3日の日程で実施した。

新しい試みとして前回から取り入れたことは、今回もすべて継続した。特に、今回の新たな試みとしては、一つの自由研修における三つの必修スポットの設定、星・水・山を中核とした自然とそのまつりのテーマ化、‘高松塚古墳及びキトラ古墳の壁画に描かれた中国系の天文図及び朝鮮半島系の四神図’と‘藤原宮跡と大和三山の位置関係に見る三山信仰とその中国の三神山信仰からの影響’を中核とした「気」の文化の本格的な主題化、近隣の副研修エリアとしての田原本の選定、近隣の副研修エリアとしての橿原の連続選定などを取り入れ企画・運営を行った。

### 〈本稿の目的〉

今回の研修を行った結果、「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修”のあり方について、改めて有効な視座を得ることができた。そこで、本稿では、今回の研修の結果の報告を行うと共に、授業科目としての『日本語文化研修』を中核とした新企画としての第Ⅶ期日本語文化研修のあるべき姿について考察することを目的とする。

## I. 企画の趣旨と研修参加学生の事前研修の流れ

### 〈企画の趣旨〉

「第21回日本語文化研修 星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・田原本—」の訪問地域は、前回実施の「第20回日本語文化研修 星・水・風とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・北葛城・生駒—」の参加者を対象にしたアンケート調査の結果、過去の実績とテーマの系統性、最近の話題性などを総合的に判断して決定した。特に今回は、前回より従来移動型研修から滞在型研修へと形式が変更となった点をも考慮し、昨年引き続き大和地域を訪問地域とした。

今回の研修の趣旨は、大和の文化について、日本古来の精霊崇拜に起源を持つ神道に、日本という国が発祥した地域ゆえに、儒教、仏教、道教などの外来宗教が早期に流入し、また、受容される中で、先進的な信仰が成立・継承されてきたという観点から考察することである。そのために、まず、日本最古の都が形成され、仏教公伝の地、あるいは多数の道教関連遺跡のある飛鳥とその奥座敷として道教の神仙境と目された宮滝のある吉野を基軸として訪問した。また、大陸伝来の道教における三神山信仰を介して、大和三山を基準に造営された、条坊制による日本最古の本格的な都城としての藤原京のある橿原、大和盆地の中央部に立地し、多重環濠を介して初瀬川と寺川につながり、龍王山や三輪山などを望む弥生集落の遺跡として、水・山のまつりの痕跡が残る唐古・鍵遺跡のある田原本を訪問した。

タイトルにある“日本人の心の源流”は、“大和が、日本という国が発祥した先進地域ゆえに、儒仏道などの渡来文化としての外来宗教が早期に流入・受容され、日本古来の神道と融合する中で、日本的な信仰を成立・継承させ、日本の中央に位置する盆地という特殊な地理的条件のもとで、日本人の精神の中核をかたちづくってきた地である”という大和の地域性をシンボリックな語句を用いて表現したものである。

### 〈研修参加学生の事前研修の流れ〉

12月中に1回、1月中に3回、研修の前日に1回、バス内で2回の計7回的事前研修を行った。

第1回から第4回では、主として、実地踏査の方法の第1段階として、主たる研修スポットを点で捉えることを目的に、代表的な文化施設・史跡について学習した。

特に第5回では、実地踏査の方法の第2段階として、自由研修エリア及びルートを目で捉えることを目的に、事前調査（下見）の報告と質疑応答を行いながら、研修エリアの空間としての規模、文化施設や遺跡の配置とそれらを結ぶルートについて学習し、当日前夜までに、事前に自由研修計画書<sup>注(3)</sup>を提出することを確認した。

第6回、第7回は、実地踏査の第3段階として、主な研修スポットと自由研修のエリア及びルートを空間で捉えることを目的として、しおりの〔資料編〕に掲載した関連資料を参照しながら、バス内で、DVDを適宜視聴した。

## II. 実施後の冊子の編集—『土地のたからまるかじり』第21号

今回の研修の報告冊子として、『土地のたからまるかじり』第21号を発行する予定である。

まず、講演や現地説明などをお願いした講師の方々からいただいた原稿を、『土地からのメッセージ』として掲載する。執筆者は以下の通りである。

木村三彦氏（飛鳥京観光協会ボランティアガイド）／富田良一氏（奈良まほろばソムリエの会会員ガイド／元吉野町観光ボランティアガイドの会会長／郷土史愛好家）／池田 淳氏（吉野歴史資料館館長）／上山好庸氏（飛鳥京観光協会会長／写真家）／奥谷知日朗氏（田原本町教育委員会文化財保存課保存活用係長）／前田義文氏（唐子・鍵遺跡史跡公園ボランティアガイドグループ副代表）

また、『たからの発掘』として参加学生から寄せられた10の文章の中から数編を掲載する。今回の研修では、参加学生から寄せられた文章は、研修エリアを特化したもの、全体的なもの、特別なテーマに関するものなど、視点や内容は多様であった。形式面でも、評論文的なものをはじめ紀行文・エッセイなど様々なジャンルが見られ、日本語文化を専攻する学生らしい文章となっている<sup>注(4)</sup>。

この他、『地元メディアの中の大和文化—』と題して、当該地域に関して近年話題となったもので地元の新聞等のメディアに登場した記事を掲載する予定である。

## III. “「異文化」の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修”における“自然とまつり”のテーマ化の意義—大和三山の場合を中心に—

ここでは、本研修で“自然とまつり”をテーマとして取り上げ考察することの意義について、大和三山を中心に、述べておきたい。

今回は飛鳥エリアに関しては、“山”のまつりは直接的には扱わなかった。しかし、飛鳥には、ミハ山、柏森、南淵山など、“山”のまつりの対象としての甘南備山の候補地がある。また、多武峰には道教に傾倒した斉明（皇極）女帝が建てた道観（道教寺院）があったとされ、仙人に関わる“山”の祭祀の痕跡がある。

“山”のまつりとして、今回、直接扱ったのは、橿原の大和三山である。藤原京造営にあたって、その都市計画の中核部分、すなわち藤原宮は、真北に耳成山、東に香具山、西に畝傍山を望むように、それら三山のほぼ中心地点に設営された。これら大和三山は、当時の人々の信仰の対象となっており、その淵源は中国の道教思想における三神山信仰にあるとされる。

古代中国の山岳信仰の一つとしての三神山信仰について、宮家 準氏は、その著書『霊山と日本人』（2004年、日本放送出版協会）の中で、次のように述べている。

渤海湾の三神山は戦国時代（紀元前475—紀元前221）に燕（河北省）や齊（山東省）の方士がこの山上の宮殿には黄金で不死の薬を持った仙人が住むと喧伝し、これを信じた燕の昭王や齊の威王らが海上のこの山を探させたという。秦の始皇帝（紀元前259—紀元前210）は不老長生を願って三神山のうちの蓬萊山の仙薬を求めて、徐福を東海に遣した。日本ではこの徐福が富士山（不死の山）、熊野新宮、熱田などにきたとの伝説も作られている。その後、漢の武帝が不死になることを願い蓬萊山の仙薬を探させたがやはり成功しなかった。この東海の三神山は不老長生の薬を持つ仙人がいること、壺に似て上は広く、中が狭い形をしていて登頂が困難なこと、大きな亀に支えられていることなど崑崙山の信仰と類似している。この崑崙山や三神山、特に蓬萊山の信仰は日本でも広く知られ、『懐風藻』には吉野山の離宮の庭園の築山に崑崙山や三神山のイメージを重ね合わせた詩が収められている。（同上書、p36～37）

ここからは、朝鮮半島における三山による都の守護という意識、すなわち三山鎮護の思想も含めて、日本古来の甘南備山の信仰に、中国伝来の三神山信仰が融合するかたちで、日本最古の本格的都城としての藤原京を守護するという三山信仰が成立したと考えられる。根拠としては、以下の3点があげられる。道教を国教とする唐が世界帝国として繁栄する東アジアの国際情勢の中で、その軍事的脅威が増す一方で、その文化・文明が直接あるいは半島経由で日本に積極的に受容されたこと。日本という国の名称や天皇という称号などが誕生し、中央集権的な律令国家がはじめて建設されていく最中であつたこと。それらの国際情勢と国内状況の中で、道教に傾倒した斉明（皇極）女帝の後継者として、同様に道教に通じた息子の天武天皇と孫娘の持統女帝を中心に、国家シンボルとしての藤原京の造営が構想・実行されたこと。これらを勘案するならば、陰陽五行思想あるいはそれを地相に当てはめた風水思想も含めて、道教由来の神仙思想に基づく三神山信仰の影響下で、日本の三山信仰は必然的に生まれたといえる。そして、その原点に、香具山、畝傍山、耳成山という三つの“山”が、太古の火山活動等の自然によって奇跡的に三角形に配置されていたこと、また、それらのほぼ中心に藤原宮を置きうる状況があつたことがわかる。“自然”が生んだ三山という“自然”が都を守護する“まつり”を成立させたことになる。

以上のように、大和三山は、“自然とまつり”をテーマとして取り上げ考察することの意義を示す好例といえよう。

#### Ⅳ. 研修旅行及び研修合宿についてのアンケート調査

##### (1) 調査の目的

2018年度の日本語文化研修への参加学生に対して、研修の内容<sup>注(5)</sup>に対する評価・意見と研修合宿についての意見を主として求めるアンケートを実施した。

##### (2) 調査の方法

研修最終日のバス内で、調査用紙<sup>注(6)</sup>を配布し、単なる評価点を示すだけでなく、今後の改善へ向けてのコメントを期待している旨を付言した。

##### (3) 回収率

当日中に10名中10通（100%）の回収を得た。

##### (4) 研修に対する評価・意見と研修合宿についての意見

(Ⅰ)(Ⅱ)は研修に対する評価、(Ⅲ)(Ⅳ)は研修に対する意見、(Ⅴ)(Ⅵ)は研修合宿についての意見をそれぞれ求める項目である。(Ⅲ)の一部及び(Ⅳ)(Ⅵ)は自由記述である。尚、(Ⅶ)では現地集合の往路の交通手段のあり方について選択肢で、また、(Ⅷ)では現地集合・現地解散の滞在型の研修について自由記述で、それぞれ意見を求めた。

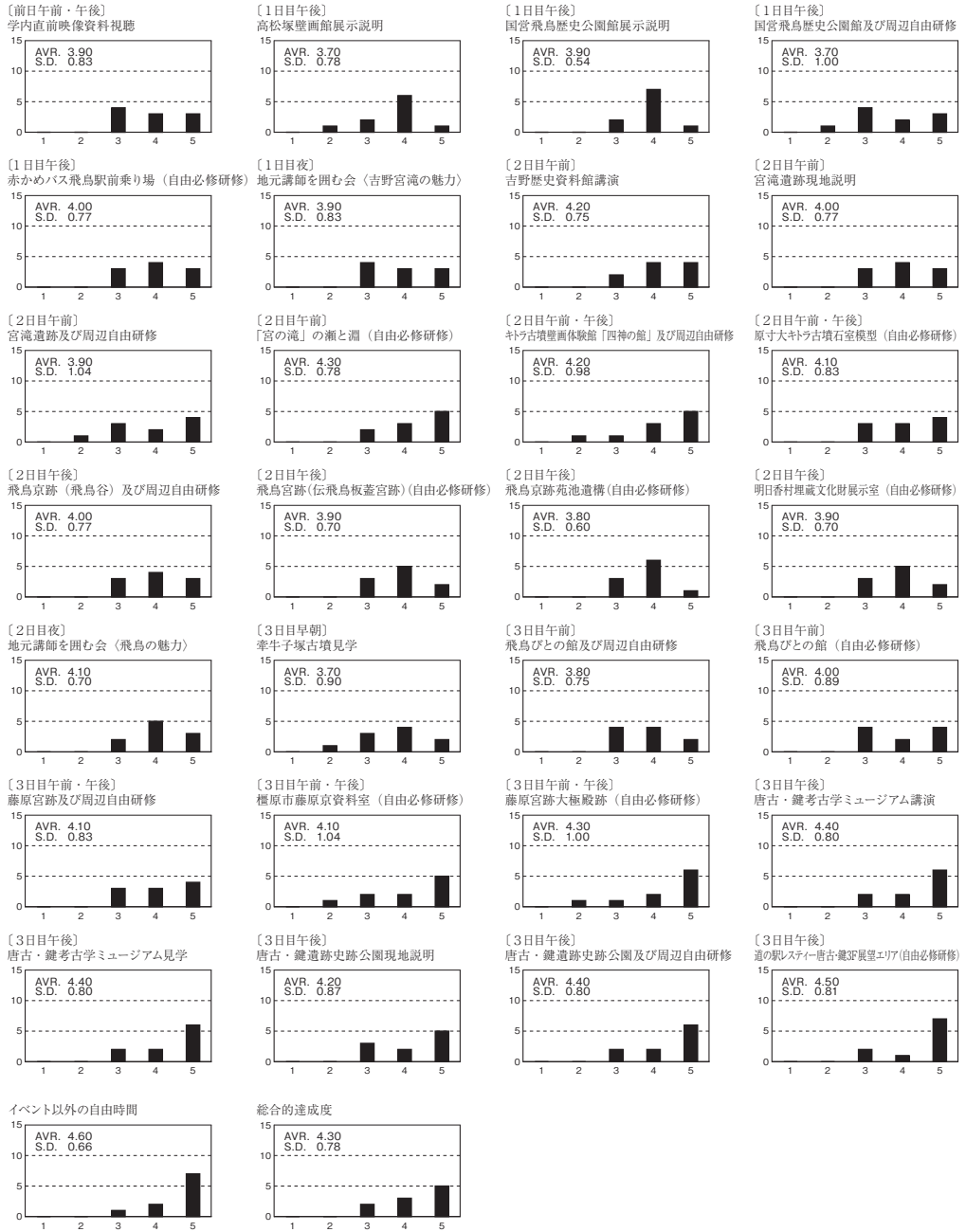
(Ⅰ)(Ⅱ)の評価については、5段階評価（1～5）を得点化し、ヒストグラムを作成すると共に、平均値及び標準偏差（得点のバラつき具合を示す数値）を算出した（図-1）。尚、図中の“AVR.”は平均値，“S.D.”は標準偏差を示す。

(Ⅲ)(Ⅴ)については、選択式による意見の集計結果を円グラフで示した（図-2／図-3）。

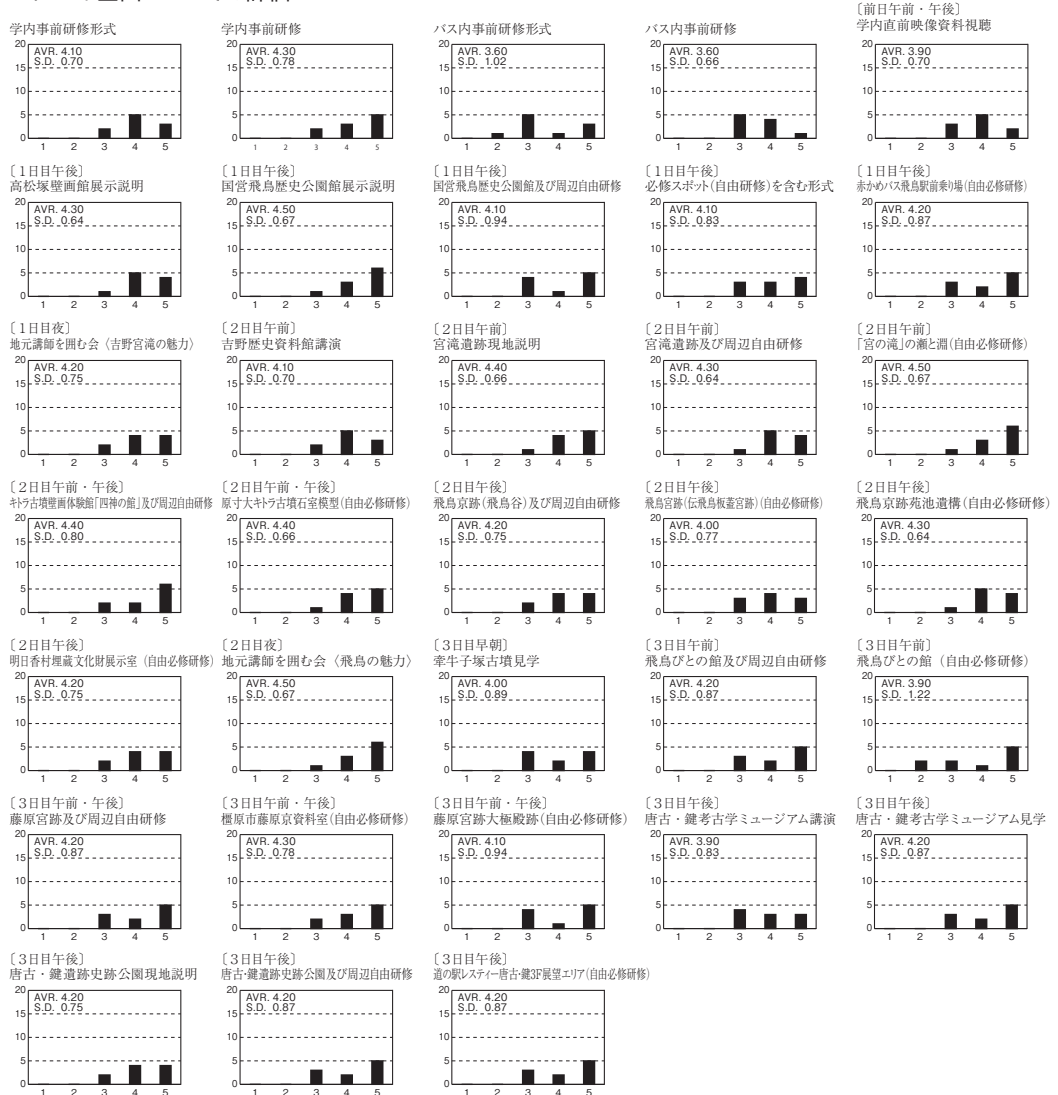
## 【研修に対する評価】

図-1

## (I) 研修についての自己評価



(II) イベント企画についての評価



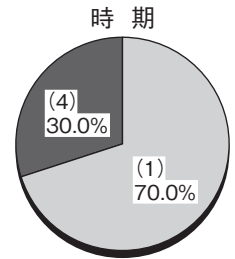
【研修に対する意見】

図-2

(Ⅲ) 研修の時期・日程・費用・場所について

①(時期)

- (1) 今回のように春休み中に実施するのがよい。
- (2) 年末・年始を外した冬休み中に実施するのがよい。
- (3) 夏休みの終わりに実施するのがよい。
- (4) 夏休み始めの集中講義終了後(8月7日前後)に実施するのがよい。

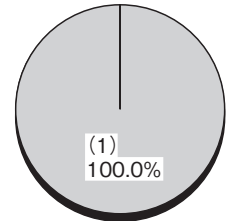


②(日程・費用)

[今回の日程・費用について]

- (1) 2泊3日(2万円程度)でよかった。
- (2) 費用を3万円程度自己負担しても3泊4日ぐらいがよかった。
- (3) 〃 4万円 〃 4泊5日ぐらいがよかった。
- (4) 〃 5万円 〃 5泊6日ぐらいがよかった。

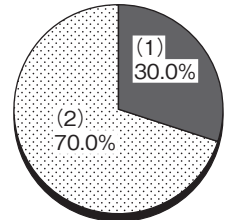
今回の日程・費用



[今後の日程・費用について]

- (1) 費用1万円で行ける範囲で1泊2日がいい。
- (2) 〃 2万円 〃 2泊3日ぐらいがいい。
- (3) 〃 3万円 〃 3泊4日ぐらいがいい。
- (4) 日帰りがよい。

今後の日程・費用

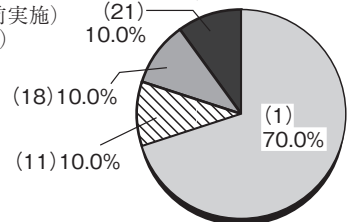


③(場所)

[今回の場所について]

- (1) 今回は、飛鳥・吉野・橿原・田原本(大和地域:奈良県)でよかった。
- (2) 飛鳥・吉野・北葛城・生駒(大和地域:奈良)の方がよかった。(昨年実施)
- (3) 宗像・福岡・春日・糸島(筑前地域:福岡)の方がよかった。(2年前実施)
- (4) 橿原・松阪・多気・伊勢(大和・伊勢地域:奈良・三重県)の方がよかった。(3年前実施)
- (5) 熊本・阿蘇・高千穂・黒川(肥後・日向地域:熊本・宮崎県)の方がよかった。(4年前実施)
- (6) 和泉・河南・太子・堺(和泉・河内地域:大阪府)の方がよかった。(5年前実施)
- (7) 神戸・淡路・南あわじ(西摂津・淡路地域:兵庫県)の方がよかった。(6年前実施)
- (8) 有田・伊万里・平戸・長崎(肥前地域:佐賀・長崎県)の方がよかった。(7年前実施)
- (9) 和歌山・田辺・新宮・那智勝浦(紀伊地域:和歌山県)の方がよかった。(8年前実施)
- (10) 中津・宇佐・由布院・国東(豊前・豊後地域:大分県)の方がよかった。(10年前実施)
- (11) 善通寺・琴平・いの高知(讃岐・土佐地域:香川・高知県)の方がよかった。(12年前実施)
- (12) 草津・大津・信楽(近江地域:滋賀県)の方がよかった。(13年前実施)
- (13) 吉野ヶ里・柳川・太宰府(筑紫地域:佐賀・福岡県)の方がよかった。(14年前実施)
- (14) 吉備路・備前・牛窓(備中・備前地域:岡山県)の方がよかった。(15年前実施)
- (15) 津和野・萩(石見・長門地域:島根・山口県)の方がよかった。(17年前実施)
- (16) 大三島・松山(芸予地域:愛媛県)の方がよかった。(18年前実施)
- (17) 横田町・出雲(奥出雲・出雲地域:島根県)の方がよかった。(19年前実施)
- (18) 福山・倉敷(備後・備中地域:広島・岡山県)の方がよかった。(20年前実施)
- (19) 岩国・大島(周防地域:山口県)の方がよかった。(未実施)
- (20) 石見・温泉津(石見地域:島根県)の方がよかった。(未実施)
- (21) 飛鳥・吉野・橿原・桜井(大和地域:奈良県)の方がよかった。(未実施)
- (22) 倉敷・総社(備中地域:岡山県)の方がよかった。(未実施)

今回の場所



[今後の場所について]

今後の研修場所(2泊3日の日程)	1位	2位	3位	合計人数	合計得点
(2) 飛鳥・吉野・北葛城・生駒(大和地域:奈良県)	2(0)	3(2)	0(0)	5(2)	12
(3) 宗像・福岡・春日・糸島(筑前地域:福岡県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(4) 橿原・松阪・多気・伊勢(大和・伊勢地域:奈良・三重県)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)	1
(5) 熊本・阿蘇・高千穂・黒川(肥後・日向地域:熊本・宮崎県)	1(0)	1(1)	2(0)	4(1)	7
(6) 和泉・河南・太子・堺(和泉・河内地域:大阪府)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(7) 神戸・淡路・南あわじ(西摂津・淡路地域:兵庫県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(8) 有田・伊万里・平戸・長崎(肥前地域:佐賀・長崎県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(9) 和歌山・田辺・新宮・那智勝浦(紀伊地域:和歌山県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(10) 中津・宇佐・由布院・国東(豊前・豊後地域:大分県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(11) 善通寺・琴平・いの高知(讃岐・土佐地域:香川・高知県)	1(1)	1(1)	0(0)	2(2)	5
(12) 草津・大津・信楽(近江地域:滋賀県)	0(0)	1(0)	1(0)	2(0)	3
(13) 吉野ヶ里・柳川・太宰府(筑紫地域:佐賀・福岡県)	1(1)	0(0)	1(1)	2(2)	4
(14) 吉備路・備前・牛窓(備中・備前地域:岡山県)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0
(15) 津和野・萩(石見・長門地域:島根・山口県)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)	1
(16) 大三島・松山(芸予地域:愛媛県)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)	2
(17) 横田町・出雲(奥出雲・出雲地域:島根県)	1(0)	0(0)	1(0)	2(0)	4
(18) 福山・倉敷(備後・備中地域:広島・岡山県)	1(0)	0(0)	0(0)	1(0)	3
(19) 岩国・大島(周防地域:山口県)(未実施)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)	1
(20) 石見・温泉津(石見地域:島根県)(未実施)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)	2
(21) 飛鳥・吉野・橿原・桜井(大和地域:奈良県)(未実施)	3(2)	2(0)	0(0)	5(2)	13
(22) 倉敷・総社(備中地域:岡山県)(未実施)	0(0)	0(0)	2(1)	2(1)	2

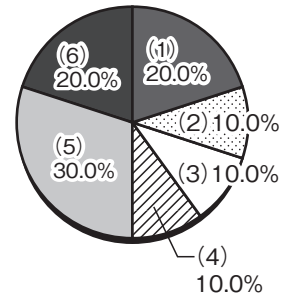
(注) ( ) 内の数字は女子学生の数を、合計得点は1位:3点, 2位:2点, 3位:1点とした総得点を示す。



## ④〈場所（特別企画）〉

- (1) 奈良地区（斑鳩・飛鳥・奈良など）に限定して実施するのがよい。
- (2) 京都地区（京都市内及び周辺）に限定して実施するのがよい。
- (3) 奈良・京都地区に限定して実施するのがよい。
- (4) 奈良・京都地区以外でもいいが、日本の歴史・文学遺産（信州、鎌倉、日光など）に限定して実施するのがよい。
- (5) 日本の文化遺産（歴史や文学遺産）以外に自然遺産（屋久島、白神山地など）にまで範囲を広げて実施するのがよい。
- (6) 歴史的に日本文化と関わりの深い近隣諸国（韓国、台湾、中国など）にまで範囲を広げて実施するのがよい。
- (7) 特に有名地区を訪問する特別企画は必要なく、中国・四国地区（瀬戸内地域及びその近接地）及びその周辺の地域文化に限定して実施するのがよい。
- (8) 特に有名地区を訪問する特別企画は必要なく、中国・四国地区（瀬戸内地域及びその近接地）の地域文化に限定して実施するのがよい。

特別企画



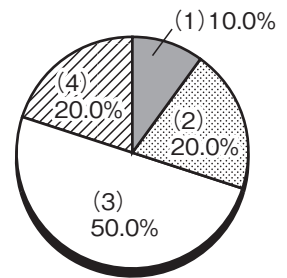
## 【研修合宿についての意見】

## 図-3

## (V) 研修旅行と研修合宿について

- (1) 費用が安くすすむところ（例：広島市内公共施設1泊2日3,000円）で研修合宿を全員参加で行う。
- (2) 費用が比較的かからないところ（例：広島県内及び周辺2泊3日2万円）で研修合宿を全員参加で行う。
- (3) 費用はかかる（例：京都2泊3日5万円／東京3泊4日7万円）が研修合宿（旅行）を全員参加で行う。
- (4) 全員参加の宿泊を伴う研修合宿（旅行）は特に必要ない。

研修旅行と研修合宿



## (5) 結果の考察

## ① 研修に対する評価

## 【参加学生の自己評価】

## 〈事前研修〉

ここでは、事前研修に対する自己評価について考察しておく。第1回～第5回の出席率の平均値は92.0%で、極めて高い数値であった。欠席者には資料等を自分で読んでおくように指示した。事前研修で配布した研究参考資料（A 3で合計39枚）の読破率は、5段階評価で全体で3.30で、「半分程度読んだ」という参加学生が多かった。バス内事前研修でのDVD等の視聴率は、5段階評価で全体で3.00であり、高いとはいえない数値であった。この視聴率の結果は、アンケートのコメントから、多武峰経由の飛鳥から吉野宮滝への移動中のバス酔いが主たる要因と考えられる。

## 〈研修イベント（含む〈学内直前映像資料視聴〉）〉

〔〈学内直前映像資料視聴〉<sup>注(7)</sup>〕

まず、〈学内直前映像資料視聴〉に対する自己評価をみておく。評価の平均値は、3.30と比較的高い評価であった。尚、今回は諸般の事情で実施できなかったが、研修全体の質の向上を目指すために、「学内直前講演・フリートークの効果的な実施方法」は今後も継続課題として検討していきたい。

## 〔〈総合的達成度〉〕

以下、当日の研修に対する自己評価について考察しておく。〈総合的達成度〉の平均値が4.30となっているように、学生は総合的にはかなりの成果があったと考えている。今回の研修のタイトルは“星・水・山とまつり 日本人の心の源流：大和の文化を訪ねる—飛鳥・吉野・橿原・田原本—”であり、目的として、「大和の飛鳥時代～現代にかけての日本語文化に関わる民俗資料及び文化資料を、実地踏査し、星・水・山とまつりを中心に日本人の心の源流として発展してきた地域の文化を通して

専門領域へのアプローチを行う’ことをあげている。実質的には、奈良県の高市郡明日香村、吉野郡吉野町、橿原市、磯城郡田原本町が研修エリアとして設定された。

本研修として前回ははじめた現地集合（飛鳥）・現地解散（大阪）という形式を今回もとった。研修の地域・日程については、第Ⅲ期～第Ⅵ期同様、第Ⅶ期の今回も「〔瀬戸内地域及びその近接地〕外で2泊3日」の研修を行った。平均値4.30は、過去の研修の中では評価の数値としては極めて高い。全21回の研修の評価（それぞれ、3.20, 3.55, 3.31, 3.48, 3.61, 3.94, 4.00, 4.25, 3.80, 4.00, 4.00, 3.65, 4.00, 3.96, 3.63, 3.88, 3.95, 4.18, 3.78, 3.82, 4.30）の中では、1番目である。

当日の研修では結果的に27（前回の大和地域は22、前々回の筑前地域は22、第18回の大和・伊勢地域は24、第17回の肥後・日向地域は27、第16回の和泉・河内地域は32、第15回の西摂津・淡路地域は30、第14回の肥前地域は28、第13回の紀伊地域は25、第12回の山城地域は21、第11回の豊前・豊後地域は18、第10回の摂津・大和地域は20、第9回の讃岐・土佐地域は22、第8回の近江地域及び第6回の吉備地域では17）のイベントを実施したが、この数は過去の研修の中で4番目の数であり、多様なイベントを実施したことを示している。

#### 〔〈イベント以外自由時間〉〕

一方、〈イベント以外自由時間〉の平均値は4.60と極めて高い数値であった。第17回の肥後・日向地域の4.14、第20回の大和地域の4.05、第16回の和泉・河内地域の3.94、第15回の西摂津・淡路地域の3.84、第14回の肥前地域の3.92、第13回の紀伊地域の4.06、第11回の豊前・豊後地域の4.15、第10回の摂津・大和地域の4.21、しまなみ海道を経由して松山まで行った第4回の芸予地域（1泊2日）の4.10など、過去の評価の高かった地域に比べても極めて高い数値である。注目されるのは、同様に高い評価が大和地域で出た点である。具体的には、桜井と吉野を宿泊地とした第10回の大和地域での研修である。桜井では桜井駅前のペンションに、吉野では金峯山寺への参道入り口付近の老舗和風旅館に宿泊した。共通点は、立地が良く、オーナーがこの種の研修の受け入れに関して経験と理解があり、いずれも貸し切りでアットホームな雰囲気でも過ごせたことにある。

今回の研修では、前回同様に、同一の宿泊施設を全館貸し切りの連泊で利用した。現代の飛鳥観光の玄関口となっている近鉄飛鳥駅の南100m程の位置にあるペンションであった。立地の良さ、オーナーの研修受け入れへの経験とそれへの理解、貸し切りでアットホームな雰囲気という点では、上述の桜井、吉野の宿泊施設と同様であった。その他、適度に充実した館内設備、利便性、景観、静けさなどの周辺環境、充実した食事を含めた良心的な宿泊料金など、前回同様に充実した時間を提供してくれた。

上記の〈イベント以外自由時間〉の平均値の極めて高い数値は、研修エリアそのものの魅力と共に、主として、連泊した宿泊施設の総合的な充実度と連続選定による成熟度に起因すると考えられる。

バスによる移動に関しても、2日目午前の飛鳥から多武峰経由の吉野宮滝までの往路、吉野川沿いから世尊寺経由のキトラ古墳壁画体験館「四神の館」までの復路を中心に、車窓からの眺めを堪能できた。

尚、天候に関しては、1日目夕方の国営飛鳥歴史公園館及び周辺での自由研修時に一時雨に見舞われ、2日目午前の吉野宮滝訪問時は前回同様に曇天であったが、全般的に天気には恵まれた。

研修受け入れの経験とそれへの理解のあるオーナーのもと、館内設備が適度に充実しており、周辺環境も、利便性、景観、静けさの面で恵まれており、食事も充実した宿泊施設を、過去の宿泊実績もふまえて全館貸し切りの連泊で利用し、バスによる移動時間も飛鳥と吉野宮滝間を中心に景観を堪能しながら自由時間を過ごせたのは有意義であった。

#### 〔自己評価の高い研修イベント〕

28のイベント（含む学内直前映像資料視聴）を比較してみると、平均値4.50, 4.40, 4.40, 4.40, 4.30,

4.30とあるように、学生は、3日目午後の〈道の駅レスティー唐古・鍵3F展望エリア（自由必修研修スポット）〉、〈唐古・鍵考古学ミュージアム講演〉、〈唐古・鍵考古学ミュージアム見学〉、〈唐古・鍵遺跡史跡公園現地説明〉、2日目午前の〈河川交流センター下の川辺付近の「宮の滝」の瀬と淵（自由必修研修スポット）〉、3日目午前・午後の〈藤原宮跡大極殿跡（自由必修研修スポット）〉に特に成果を得たと感じている。

この中で、「宮の滝」の瀬と淵や藤原宮跡大極殿跡などは、豊かな自然と優れた景観を背景に実地体験ができる地として、想定範囲内の結果である。しかし、企画側が、「自由研修ではあるがここだけは外せないという意図」で設定した「自由必修研修スポット」が、評価の上位5位までに三つ入っていることは注目される。わけでも、県中南和地域の歴史・文化・観光の玄関口としてオープン（2018年4月20日）して1年に満たない道の駅レスティー唐古・鍵は、広域観光情報、地元田原本の歴史・文化の展示、土産品、農産物、飲食店、休憩所などが充実しており、結果的にその施設内にある展望室エリアの評価を押し上げたと考えられる。また、実際に、展望室からの大和盆地の眺望は、特に東西方向と南方向が優れている。具体的には、今回の中核的な研修エリアである飛鳥や吉野を南に、二上山、葛城山系、そして盆地内の河川が大和川として合流し、大和盆地唯一の水の出口となっている亀の背溪谷を西に、また、日本国誕生地としての飛鳥の前身にあたるヤマト王権の発祥地域が山麓に広がる巻向山や三輪山を東南に、また、その手前にミュージアムでの展示説明と史跡公園での現地説明を受けたばかりの唐古・鍵遺跡を見渡すことができる。圧巻なのは、纏向エリアに比定される初期ヤマト王権発祥の地の礎となったムラとされる巨大な弥生集落が、広大な敷地に、特徴的なデザインの間をははじめ、環濠や掘立て柱などが再現されていることである。それらは、初瀬川と寺川の間に再現された巨大な多重環濠集落を舞台に、見るものを2000年以上前の時空間に誘いつつ、その後の大和地域の歩みを、変わらぬ盆地とそれを囲む山々の景観を背景として想像させる。〈道の駅レスティー唐古・鍵3F展望エリア〉は、研修の最終訪問スポットとして適地であった。この選定が、結果として、関連する展示説明や現地説明との相乗効果をもたらしたともいえる。本研修の中核的な研修エリアである飛鳥及び吉野も総じて高い評価を得たが、副研修エリアも中核的な研修エリアとの関連付け次第で成果につながる点に留意しておきたい。

今回の七つのいわゆる自由研修の平均値は4.04で、過去全20回の中の第1番目の数値となった第10回の摂津・大和における研修の平均値4.45や第2番目の数値となった第5回の大和地域を対象とした特別企画の平均値4.36などと比べるとやや低いが、過去の研修の中ではかなり高い数値となった。

前回第20回の大和地域における研修の4.10も含めて、自由研修の実施地として参加者の自己評価は高くなる傾向がある。

要因としては、まずは、歴史的に明解な時代性を有し、それを基に創造されてきた現代的な魅力や文化的な多様性などの面において充実していた点があげられる。また、総じて他の研修地への移動は短時間であった点も要因としてあげられる。確かにバス内事前研修としての映像資料の視聴時間の確保の面では不利ではあったが、利点の方が大きかった。さらに、自由研修地の中核部分にある訪問スポットのほとんどが互いに近接していたことも幸いした。

本研修では自由研修の地を設定する際の理想の条件として、日本の歴史の中で注目を集めた明確な時代性があり、徒歩で移動しうるコンパクトなエリア内に文化的な多様性があることを考えている。前回同様に、今回も、大和地域において、飛鳥、吉野を中心に、これら二つの条件に適合した地の設定ができた。

もっとも、自由研修の地の設定では、上記の二つの条件を優先しつつも、バスによる移動を伴う場合には、現地到着直前のバス内事前研修と自由研修の時間確保が相反する中、それらのバランスを考慮するならば、二つの地に適度な距離があること、また、その沿道に特段注目すべき景観等がないこ

と、さらには、バス内事前研修の実効性を考慮するならば、可能な範囲でバス酔いを回避しうる移動ルートを確認することなどの前提が必要となろう。

#### 〔講演及びフリートーク〕

今回、講演及びフリートークは全部で四つで、講演全体の平均値は4.15でかなり高い評価であった。

平均値4.15は、第1回～20回の研修における同種の講演の平均値（それぞれ、3.53, 3.11, 3.49, 3.61, 3.94, 4.04, 4.06, 4.00, 3.87, 4.07, 4.00, 4.01, 3.81, 3.78, 3.64, 3.94, 3.91, 4.09, 3.87, 4.08）と比べて、過去1番目の数値であり、極めて高い評価となった。今回も講演に対する高いモチベーションを持った地元講師に恵まれ、また、参加学生もその熱意・意欲に対して、傾聴や質疑応答を通して真摯に応えていた。

尚、今回実施した二つの〈地元講師を囲む会：フリートーク〉は、それぞれ3.90と4.10であり、前回と同じ講師の方によるものであったが、前回同様に、内容面の充実が比較的高い評価につながった。

両フリートークが共に、連泊した宿泊所の空調設備やテーブル、椅子、調度品、グランドピアノなどの備品が整った心地の良い雰囲気のある1Fラウンジで行われたことも有効に機能した。前々回の筑前研修では、外部環境及び参加人数を配慮した“地元講師を囲む会：フリートーク”の会場設定が、今後の検討課題となったが、前回同様に今回もその点では問題はなかった。

#### 〔総括〕

以上を、思い描かれる参加学生の平均像として総括するならば、次の①から⑧をその構成要素として指摘することができる。すなわち、

①道の駅レスティー唐古・鍵3F展望エリア、唐古・鍵考古学ミュージアム講演、唐古・鍵考古学ミュージアム見学、唐古・鍵遺跡史跡公園現地説明、河川交流センター下の川辺付近の「宮の滝」の瀬と淵、藤原宮跡大極殿跡を中心に、講演・フリートークや現地説明など地元講師との相互交流を目指した研修を通して、大和の文化・歴史・風土について学んだ／②改めて大和地域には、日本という国の発祥した地としての歴史と文化があること、また、日本最古の都が置かれた地として渡来文化がいち早く流入・受容されたことなどに特色を持つという地域の伝統があることを認識した／③特に“星・水・山とまつり日本人の心の源流”という視点から、異国の文化としての異文化も含めて、異文化が創造的に融合した文化があることを認識した／④③に関する価値ある歴史的遺産、文化施設、自然の造形、風土性を持った伝統文化を直接体験して感銘を受けた／⑤比較的天候には恵まれ、バスによる移動中も、飛鳥と吉野宮滝間の往路・復路を中心に総じて快適であった／⑥地元講師の人たちとの交流ができた／⑦充実した館内設備、また利便性、景観、静けさなどの面で優れた周辺環境、さらには味に定評のあるレストランが併設されたペンションならではの食事を堪能しながら、同一の宿泊所に貸し切りで連泊し、アットホームな雰囲気の中で気の合う友人と共に有意義な時間を過ごせた／⑧総じて意欲を持って研修に参加できた、というものである。

#### 【企画に対する評価】

##### 〈事前研修〉

まず、事前研修に対する評価について考察しておく。第1回～第5回の学内事前研修形式およびその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ4.10, 4.30であった。また、第6回、第7回のバス内事前研修形式及びその企画内容に対する評価の平均値は、それぞれ3.60, 3.60であった。前回からは、現地集合（飛鳥）・現地解散（大阪）の形式となったため、バス内での映像資料の全視聴時間は、2年前までの借り上げバスによる全行程移動型研修に比べ、大幅に減少している。具体的には、現地借り上げバス内での映像資料の全視聴時間は、前회가約1時間50分、今回が約1時間30分で、従来の2分の1から3分の1程度であった。移動時間中のDVD視聴に関しては、参加学生から、その必要性を認めつつも、飛鳥や吉野のように興味深い景観、史跡などが点在する地における移動中の場合は、

それらへの注意が削がれる面もあるとの意見がある。また、個人差はあるがバス酔いの問題も看過できない。今後の継続検討課題としたい。

#### 〈研修イベント（含む学内直前映像資料視聴）〉

次に、研修のイベント企画に対する評価について考察しておく。研修のイベント企画に関しては、28のイベント企画（含む学内直前映像資料視聴）の平均値が4.21であるように、参加学生は高い評価をしている。標準偏差の平均値も0.79と分散は比較的小さい。上述の〈総合的達成度〉の4.30と勘案すると、参加学生は、全体としては、企画そのものの充実度がある程度認めたと、自らもある程度意欲を持って行動し企画を消化しつつそれなりの成果を上げた結果となっている。

#### ② 研修に対する意見

ここでは、〈時期〉〈日程・費用〉〈場所〉に関する全体的な意見を確認しておく。今回の研修参加者は、〈時期〉〈日程・費用〉〈場所〉共に現況に対して肯定的である。特に〈日程・費用〉については、今回は〈2泊3日（2万円程度）でよかった〉とするものが100%で、参加学生の全員が短期集中型の2泊3日の日程を支持していることがわかる。一方で、今後については、〈費用1万円で行ける範囲で1泊2日がよい〉とする参加学生が30.0%いた。しかし、今回についての意見のように、研修内容の充実度を大前提として、自己負担となる費用の抑制、集中力の持続などを総合的に考慮するならば、2泊3日（2万円程度）が現実的である。

〈今後の場所（2泊3日の日程）〉については、選択肢の中では〈飛鳥・吉野・橿原・桜井（大和地域：奈良県）（未実施）〉が13点、〈飛鳥・吉野・北葛城・生駒（大和地域：奈良県）（昨年実施）〉が12点、〈熊本・阿蘇・高千穂・黒川（肥後・日向地域：熊本・宮崎県）（4年前実施）〉が7点、〈善通寺・琴平・いの・高知（讃岐・土佐地域：香川・高知県）（12年前実施）〉が5点、〈吉野ヶ里・柳川・太宰府（筑紫地域：佐賀・福岡県）（14年前実施）〉が4点、〈横田町・出雲（奥出雲・出雲地域：島根県）（19年前実施）〉が4点と希望者が多かった。大和地域を希望する傾向は見られるが、全体としてかなり分散する結果となった。また、従来とは異なり、特色のある様々な地というよりは、近隣地域や修学旅行での馴染みのある地を希望する傾向が見られる点には注意が必要であろう。現地集合・現地解散形式への反動としての近隣地域あるいは経験地域への回帰現象の可能性も視野に入れつつ今後の検討課題としたい。

特別企画の訪問場所については、様々な考え方に分かれたが、参加学生の全員が、近隣諸国はともかく、少なくとも中国・四国地区およびその周辺の地域文化を越えて研修地を設定することを支持していることがわかる。本研修では、特別企画としては、日本文化の原点に立ち返ることを意図して、4年に一度程度のサイクルで、“日本文化の発祥地”としての大和地域を、飛鳥、吉野、斑鳩、奈良などの“万葉のふるさと”を中心に訪問するのが、有効かつ現実的であると考えてきたが、第20回から少なくとも3年間は、飛鳥、吉野を中心に、大和地域において通常研修を実施する予定である。また、大和地域での3年間の研修結果を勘案しつつ、その継続のあり方について考察したい。

#### ③ 研修合宿についての意見

今回のような自由参加形式で移動を伴う旅行を中心とした研修に参加した学生が、全員参加形式の研修合宿についてどのように考えているかを調査する目的でアンケートを行った。ここでは、〈研修旅行と研修合宿〉の関わりについての全体的な意見を確認しておきたい。

“全員参加の宿泊をともなう研修合宿”を行うことに対しては、“特に必要ない”としている参加学生が20.0%いた。一方で、今回の研修に参加した学生の80.0%が、“2泊3日・3泊4日の全員参加形式の研修合宿あるいは研修旅行”に対して肯定的である。個人差も見られるが、遠隔地における現地

集合（飛鳥）・現地解散（大阪）の形式にもかかわらず参加してきた学生は、基本的にこの種の研修に積極的であることが要因と考えられる。

## 終わりに

本研修は、2019年度も、2016年度以前の移動型研修ではなく、滞在型研修を実施することが決まっている。第Ⅶ期3年計画の3年目は、2泊3日の日程で、今年度同様に‘大和の歴史と文化’をテーマに、飛鳥・吉野・橿原・桜井を訪問エリアとして設定し、現地で借り上げバスを利用することを前提に、内容の検討を進めている。また、今年の7月下旬および8月下旬には、現地において事前調査を行い、日程の原案作りも始めている。特に、3年連続および2年連続で訪問することになるそれぞれ飛鳥エリアと橿原エリア（2016年実施の大和・伊勢研修でも訪問）は、12年前の2007年に、今後登録の可能性があるユネスコの暫定世界遺産リストに記載されており、現在も登録決定に向けての様々な取り組みが推進されている。

また、3年連続で訪問する予定の吉野エリアでも、2月の研修後に、その訪問スポットであった宮滝遺跡に関して、昨年に続き新たな発掘調査結果が公表され、話題となっている。さらに、第Ⅶ期の研修としては初めて訪問することになる桜井エリア（2008年実施の摂津・大和研修でも訪問）は、纏向遺跡が、邪馬台国所在地としてその有力候補の一つとなっており、ヤマト王権・国家誕生の地として注目され続ける中で、世界遺産登録へ向けての気運も高まりつつある。

このように、大和地域では、研究成果も含めて良質の情報が近年数多く発信され、文化施設を中心に個々のエリアの整備も進んできている。本研修では、2003年に飛鳥、2008年に吉野、そして2018年および2019年に両エリアを既に訪問したことになるが、これらの実績と共に、副研修エリアの選定も含めて、訪問エリアに関する以上の好機を活かしながら研修の準備を進めたい。

本研修は、前回から、20年余りにわたり西日本各地を探訪する中で得てきた成果を活用しながら、日本創生の地にして日本人の心の原点の地でもある飛鳥で、“自然とまつり”の視点から“日本とは何か”を改めて問い直しはじめることになった。目指すところは、渡来文化との融合の中で生まれた“‘日本’という国の成り立ち”の理解、そして、もう一つの“日本”としての‘地域文化’の活性化のための相互交流である。

第Ⅶ期同様に、第Ⅶ期の研修においても、時代の流れを視野に入れつつ、ものがたり観光行動、比較文化、旅の文化などに関する学外の研究組織からの示唆を得ることも重要である。その示唆のもとに、新カリキュラムに基づく本研修の受講生と共に新たな形式を試みる中で、研修のより進化・充実したあり方を考究していきたい。

## [注]

- (1) この点についての詳細は、本研修の報告冊子に、「『異文化』の創造的融合の実際—大和研修（飛鳥・吉野・橿原・田原本）を中心に—」という小稿を執筆し掲載する予定である。
- (2) “秋枝（青木）美保・戸田利彦『『異文化』の理解を目指した研修旅行（Ⅳ）—瀬戸内（福山・倉敷）国際交流史』の実地研修—」、『比治山大学現代文化学部紀要』第6号、1999”から、“戸田利彦『異文化』の創造的融合の理解と地域文化活性化のための相互交流を目指した日本語文化研修（Ⅶ）—大和地域（飛鳥・吉野・北葛城・生駒）の文化史』の実地研修—」、『比治山大学現代文化学部紀要』第25号、2018”まで、20回分の成果を本紀要に掲載している。
- (3) B5（表のみ）1枚からなる自由研修計画書を①～⑦の7枚使用。[注]（2）に示した文献の第6号

の〔資料2〕に同形式のもの掲載。1日目午後の自由研修計画書①国営飛鳥歴史公園館及び周辺については、本番前日の直前研修の際に配布し、翌日の現地集合直後に回収した。

- (4) 本稿の執筆者である戸田も、この研修の報告冊子に、「〔気〕の文化の継承過程に関する研究（XVI）―道教の影響及び山岳信仰としての三山信仰の成立事情を中心に―」という小稿を執筆する予定である。
- (5) 各イベント企画のねらいについて、今回の新たなものについて以下に示しておく。尚、前回と同様のものについては、[注] (2)に示した文献の第25号を参照のこと。
- 〈2日目〉飛鳥京跡の飛鳥京跡苑池遺構（飛鳥の歴史と文化の理解）（自由必修研修）
- 〈3日目〉藤原宮跡及び周辺自由研修（自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる橿原の風土と文化の理解）／橿原市藤原京資料室（橿原の風土と文化の理解）（自由必修研修）／藤原宮跡大極殿跡（橿原の風土と文化の理解）（自由必修研修）／唐古・鍵考古学ミュージアム講演（テーマ：弥生の環濠集落唐古・鍵遺跡と纏向遺跡）（田原本の歴史と風土の理解）／唐古・鍵考古学ミュージアム見学（田原本の歴史と風土の理解）／唐古・鍵遺跡史跡公園現地説明（テーマ：大和盆地における日本国創生の源流としての弥生環濠集落）（田原本の自然と風土の理解）／唐古・鍵遺跡史跡公園及び周辺自由研修（自分の足で史跡や文化施設を踏査することによる田原本の自然と風土の理解）／道の駅レスティー唐古・鍵3F展望エリア（大和の自然と風土の理解）（自由必修研修）
- (6) A3（表裏）2枚及びA3（表）（No.1～No.6）からなる調査紙を使用。[注] (2)に示した文献の第6号の〔資料3〕に同形式のもの掲載。
- (7) 安芸宮島の巖島神社は筑前の宗像大社と同じ海の神すなわち宗像三女神を奉祭する。その宗像三女神は、飛鳥時代に持統女帝によって自らに模して創出されたとする説もある皇祖神天照大御神の子孫とされる。そのような神を祭る社殿を整備したのが平清盛である。これを淵源に、安芸宮島は日本海軍守護神鎮座地となり、呉における軍港造営と戦艦大和の建造、そして軍都広島への原爆投下へといたる。そこで、平清盛と世界遺産巖島神社に関するVTRを視聴し、宗像三女神と皇祖神天照大御神、また、日本国創生地としての大和の飛鳥と国際平和文化都市としての安芸の広島とを比較する中で、特に明治以降の日本国及び天皇の歩みが広島の歩みに投影されていることへの気付きも含めて、“自己の文化の理解”の促進と“相手文化との相互交流”の準備を行った。

## 参考文献

- 浅野裕一（2006）『古代中国の宇宙論』岩波書店
- 飛鳥資料館（2001）『星々と日月の考古学』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所飛鳥資料館
- 上野 誠（2008）『大和三山の古代』講談社
- 大隈和雄（2003）『文化史の構想』吉川弘文館
- 菊池章太（2008）『儒教・仏教・道教―東アジアの思想空間』講談社
- 笹生 衛（2016）『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館
- J.V.ネウストプニー（1995）『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 諏訪春雄（2018）『日本の風水』KADOKAWA
- 武澤秀一（2017）『建築から見た日本古代史』筑摩書房
- 戸矢 学（2013）『神道と風水』河出書房新社
- 「21世紀の『日本事情』」編集委員会（1999）『21世紀の『日本事情』―日本語教育から文化リテラシーへ―』『日本事情』研究会

- 仁藤敦史（2011）『都はなぜ移るのか—遷都の古代史—』吉川弘文館  
福永光司・千田稔・高橋徹（2003）『日本の道教遺跡を歩く』朝日新聞社  
藤田三郎（2019）『ヤマト王権誕生の礎となったムラ』新泉社  
藤田友治（2002）『古代日本と神仙思想』五月書房  
細川英雄（1994）『実践『日本事情』入門』大修館書店  
細川英雄（1999）『日本語教育と日本事情—異文化を越える—』明石書店  
細川英雄（2002）『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社  
前林清和・佐藤貢悦・小林寛（2000）『〈気〉の比較文化—中国・韓国・日本』昭和堂  
牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学』アルク  
宮家準（2004）『霊山と日本人』日本放送出版協会  
吉野裕子（1993）『持統天皇 日本古代帝王の呪術』人文書院  
吉野裕子（2000）『陰陽五行思想からみた日本の祭 伊勢神宮祭祀・大嘗祭を中心として』人文書院

〈キーワード〉

異文化, 大和, 文化史, 実地研修, 自文化

戸田 利彦（現代文化学部言語文化学科日本語文化コース）

（2019. 11. 6 受理）